

教育課程 ・ カリキュラム

1. 定義 ・ 意義

教育課程は、一般に

学校教育の目的や目標を達成するために教育の内容を児童生徒の心身の発達に
 じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である
 (文部省編『小学校指導書 教育課程一般編』1979)

と解されてきた。しかし、この定義には、計画に基づいて展開される児童生徒の活動・実践は含まれていないし、児童生徒が非計画的で無意図的な活動から自ら学び、経験する事柄は含まれていない。

いわゆる「隠れた」部分も含めた、より広義の定義としては

「なんらかの教育機関において、計画的ないし非計画的な教育活動を通して、学習者に身につけるよう求めた、ないし学習者が身につけた教育内容」
 となる。

教育課程はカリキュラム curriculum の訳語であるが、それはラテン語の currere (走るコース、歩んできた道) に由来する。カリキュラムや教育課程に含まれる意味内容は歴史的にも、理論的、実践的にも多様である。学校教育において教育課程という用語が一般的になったのは 1950 年 (昭和 25) 以後である。それ以前には教育的見地から選択・構成された教材の区分を小学校では教科、中学校以上では学科とよんでいたのも、教科・教材の学年配当を小学校では教科課程、中学校以上では学科課程といった。現在、教育課程は、小・中学校では教科、特別活動、道徳、および総合的な学習の時間によって編成され、高等学校では教科、特別活動、総合的な学習の時間によって編成される。

各学校が創意工夫をこらして教育課程を編成するのであるが、まったく独自に恣意(しい)的に編成してよいというのではない。公教育としての性格から、そこには、踏まえねばならない一般原則がある。教育課程編成の基準になるものが学習指導要領であるが、その総則の規定からみると編成にあたって留意すべき一般原則は、

- (1) 法令および学習指導要領に示すところに従うこと
- (2) 児童生徒の人間としての調和のとれた育成を旨ざすこと
- (3) 地域や学校の実態を十分考慮すること
- (4) 児童生徒の心身の発達段階と特性を十分考慮すること



などである。

このように、教育機関における教育課程は、学習者の要求と社会的・文化的諸要求を構造的契機として成り立ち、その諸条件の変化が教育課程の改善を求める。

2. カリキュラム観の見直し

「カリキュラム」と「教育課程」とは原語と訳語の関係で、意味は同じであると考えられてきた。しかし、1970年代後半からはかならずしもそうはいえない使われ方になってきている。たとえば、

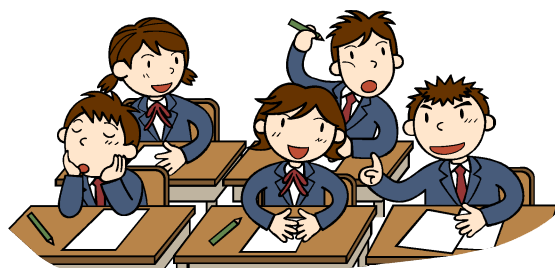


学習者の「学びの履歴」とか、学習者自身が「結果として身につけた内容」すべてを含めて用いるカリキュラム観が強調されてきた。

このようなカリキュラム観の出現は、学習観や指導観あるいは評価観が見直されてきていることの反映である。「教育課程」と「カリキュラム」という用語を比較してみると次のような相違を指摘できる。

教育課程	カリキュラム
「隠れたカリキュラム」を含まない。 非計画的で、無意図的な教育内容としての学校文化、校風、伝統といった「隠れた」ものは含まれない。	「隠れたカリキュラム」を含む。 } 含まれる
教える側からみた計画や枠づけ、つまり 「何を教える(教えた)か」という視点が優先する。	子供の側からみて、学習して身につける(つけた)ものという観点からとらえる。 「子供は何を学習したか」「学びの履歴」といった意味を強く含みもって用いられる。
教育内容についての国家的基準によるプラン、しかも立案(構成)レベルのものを表す用語であり(教育課程行政用語)その展開過程は含まれていない。	目標、内容・教材、教授・学習活動、評価の活動なども含んだ広い概念として用いられている。
このようなカリキュラム観の見直しは、OECD-CERI(経済協力開発機構の教育研究革新センター)の「カリキュラム開発に関するセミナー」(1974)での提唱を契機としており、そこでは、カリキュラムは「隠れた」部分も含めて「学習者に与えられる学習経験の総体」としてとらえられていた。	

<注：表による表示は沼澤>



3. 類型

カリキュラムの編成にあたって、教育内容を選択し組織する原理をどこに求めるかによって異なったカリキュラムができあがる。たとえば、教育内容に着目すると教科カリキュラムと経験カリキュラムに類型化できるし、教科相互の関係に着目すると分化カリキュラムと統合カリキュラムに分類できる。また履習原理の違いに着目すると、年齢主義（履習主義）に基づくカリキュラムと、課程主義（修得主義）に基づくカリキュラムの類型化が可能である。ここでは、教科—経験、分化—統合という軸の組合せによるカリキュラム類型をあげておく。

(1) 分離教科カリキュラム *separate subject curriculum*

個々の教科はその背後にある親学問の論理的知識体系を教科内容とし、教科相互の間にはなんらの関連も考慮されない多教科並列のカリキュラム。

(2) 相関カリキュラム *corelation curriculum*

教科の区分を踏襲しつつ、学習効果の向上のため、二つないし三つの教科の相互関連を図ったカリキュラム。

(3) 広領域カリキュラム *broad-fields curriculum*

いくつかの教科を融合して、より広い領域で教育内容を再編したカリキュラム。

(4) コア・カリキュラム *core curriculum*

生活現実の問題解決を学習する「中心課程」と、それに必要な限りでの基礎的な知識や技能を学習する「周辺課程」からなる。中心課程の内容は経験カリキュラムとして構成され、カリキュラムの中核的位置にある。周辺課程は各教科によって構成されるから、まったく教科の存在を認めない経験中心カリキュラムに比べて教科カリキュラムに近いといえる。

(5) 経験中心カリキュラム *experience centred curriculum*

統合カリキュラム、生活カリキュラム、活動カリキュラムともいわれ、教科の存在は認めず、児童生徒の興味と目的をもった活動からなる統合的な単元で全体が組織される。総合単元の構成にあたって二つの立場が生じた。一つは、学習内容として社会の現実の諸問題を取りあげ、これを総合的に検討し、解決の方向を探らせるものであり、ほかは、子供の心性は未分化であるから統合的な内容で学習させるという、もっぱら心理的側面からの理由によるものである。

歴史的にみて、カリキュラム改革を動かしてきた基本的動機は、いかにして分離教科カリキュラムの欠陥を克服するかという努力、つまり生活・経験の重視や「統合」への要求であった。

分離教科カリキュラムが長く採用されてきた理由としては、文化の各領域について網羅的な知識・技能を習得させることを学校の任務と考える教育観が支配的であったこと、学問の体系がほぼそのまま教科内容の体系になりうるからカリキュラム編成が容易であり、知識・技術を体系的、効率的に教えることが可能だからである。

しかし、この種のカリキュラムでは、学問の発達・分化につれて教科の数が増え、学習者の負担を重くすること、結果としての知識の伝達が主要任務であるから記憶的にのみ学習しがちで、創造的思考力や実践力は育ちにくいこと、学習内容が抽象的、一般的なものになりやすく、地域の特殊性、学習者の興味・関心を軽視した授業に陥りやすいこと、といった問題点が指摘されてきた。

これらの問題点を克服するものとして、経験カリキュラムやさまざまな改造された教科カリキュラムが登場した。生活科や総合的な学習の時間がわが国の教育課程に登場した理由の一つもこのへんにあった。

[執筆者：天野正輝]

関連情報参考文献 天野正輝編『教育課程——重要用語 300 の基礎知識』（1999・明治図書出版）

安彦忠彦編『カリキュラム研究入門』新版（1999・勁草書房）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より抜粋

◆◆【3つの確認】カリキュラムの諸類型◆◆◆◆◆

教科中心カリキュラム

教科内容の教授－学習を中心に据えたカリキュラム。

教科を並列的に配列し、それぞれの教科で学ぶ目標を定め、目標達成のための各教科教育内容・教育方法を置いている。教科で教えるべき内容の達成が重視されるため、**効率的な内容習得をねらえる学習**となるが、

反面、学習者心理を無視した授業に陥りやすいという短所もある。

関連カリキュラム、合科カリキュラム、コアカリキュラム

経験中心カリキュラム

学習者の体験や経験を重視し、それを基盤として成長を促すための教育内容を設定する。

そのため、体験学習や問題解決学習、実習、創作などの学習活動が行われる。**学習者中心の授業が行われやすいが**、

反面、明確な教育内容が示されず、授業の成果が曖昧となったり、活動を行うことに終始し、学習者がはいまわったりする可能性もある。

☆ **隠れた**カリキュラム

隠れたカリキュラムとは、学校のフォーマルなカリキュラムの中にはない、知識、行動の様式や性向、意識やメンタリティが、意図しないままに教師や仲間の生徒たちから、教えられていくといったものをいう。

教育困難校における負け犬意識の染み付いた生徒や有名進学校のエリート意識の固まりのような生徒から、ある特定の学校の校風に染まった生徒など、学校という制度を通しての社会化の特殊なものをいう場合に、社会学、教育社会学の分野でよく用いられる用語である。「潜在的カリキュラム」という表現もされる。

参考文献・URL[編集]

平沢茂編『教育の方法と技術』図書文化社、2006年

佐藤学『教育方法学』岩波書店、1996年

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より抜粋